このお話は、とあるオンラインゲームに基づいた、とある本丸内での、とある審神者と刀剣男士たちとの交流（色々な意味で）を描いたハートウォーミングなお話である。

とあるゲームとは、歴史改変を目論んで過去の合戦場に出没する敵と、日本の名刀を擬人化した『刀剣男士』たちとを戦わせて強化していく刀剣育成シミュレーションゲームだ。そのゲームを元に、現在、アニメや舞台など各種メディアミックスが展開されている。『刀剣男士』と呼ばれるキャラクター、そしてそのキャラクターたちを取り巻く世界観が綿密に創り込まれており、男女問わず幅広い層に人気があるのだが――。

ゲーム内の世界が、現世とは別の次元に実在していることを知る者は少ない。

第一章　本丸就任　　加州清光・へし切長谷部

「あのさぁ、いい加減腹括ったら？」

目の前の青年が何度目かの大きな溜め息をついた。

切れ長の目にすっと通った鼻梁、淡い桃色の唇は薄く、口元には小さなほくろがある。そのほくろが青年の色気を存分に引き出していた。

座卓に頬杖をついた艶っぽいかんばせが、今は苦々しく顰められている。

「うん、わかってる、……でももうちょっと待って」

「それ五回目ー。もうちょっとって具体的にあとどのくらい？」

「いや、だからもうちょっと……」

「いっそのこと、みんなをここに呼んじゃう？」

「いやいやいや。五十振り近くもこの部屋に入らないでしょ！」

いくら審神者には広い部屋が宛がわれていると言っても、この二十畳ほどの部屋に本丸

の男士全振り集合はさすがに無理だ。
「冗談だってば」
俺の慌てた様子を見て、彼は茜色の瞳をにやりと細め、唇の両端をキュッと上げた。
加州清光――、この本丸の初期刀である。見た目は俺とあまり変わらない年齢の「青年」だが、実際の齢はすでに五百を超えている。……と年齢の話をするととても渋い顔をされるのだが、彼はこの先も歳をとらず若い見た目のままだ。
人の形をとり人間の三大欲求を持っている彼も、紛れもなく刀剣に宿った「神」なのだ。
「……うう、腹痛い」
「また厠？」
「仕方ないだろ！　人間はね、緊張すると腹が痛くなるものなの！　繊細なの！」
「ああーもう、埒が明かない！　みんなずっと待ってんだから広間行くよ、主！」
「えっ?!　もう?!」
「そう！」
勢いよく立ち上がってそばに寄ってきた加州が、俺の両脇に手を入れ、まるで子どもを抱き上げるようにひょいっと立たせた。ちなみに俺は同年代男性の標準身長・体重はあって、特別小さいわけでも軽いわけでもない。

細身に見えても加州は刀剣男士、米俵ぐらいは片手で軽々と持ち上げられるほどの腕力があるのだ。

審神者部屋を出て入り組んだ廊下を抜けると、広い庭に面した縁側に出る。大広間に沿って長く続く縁側を、加州に手を引かれてつんのめりながら歩く。右手側にある庭には、芝桜やスズラン、なでしこ、ハナミズキなど色とりどりの花が咲き乱れ、賑やかな春の装いを見せていた。庭のどこかの木の上で鶯が長閑に鳴く声も聞こえている。

今のこの状況では、春の庭の美しさを味わい楽しむ余裕など到底ないけれども！

「……今日は全振り揃ってるんだっけ？」

「そうね。ていうか、ここ数か月はどの刀も出陣してないし遠征もしてない。審神者がいなかったんだから出たくても出られないよ」

「そ、そうだよね」

刀剣男士たちは審神者の命により過去の合戦場へと出陣なり遠征なりを行う。逆に言うなら審神者が命じなければ男士たちは一切身動きが取れないのだ。前任の審神者が引退して現世に戻ってから数か月の間、この本丸は審神者不在だったので、全振りが今本丸に揃っているのは当たり前のことだった。

そして今日、俺がこの本丸に新しい審神者として派遣されてきたわけで、これからこの本丸に顕現している刀剣たち（厳密に言うと刀剣の付喪神たち）と顔合わせをするのだ。

朝方早くにこの本丸に着き（全振り総出での出迎えは遠慮してもらった）、今の時刻はすでに昼近く。元来の人見知りとコミュ障が発動してしまい、なんのかんのと対面の時を引き延ばしてはいたが、それももう限界のようだ。

――いや、ビビるの当たり前じゃん！　だって相手はただの『人』じゃねえんだぞ。『神』だぞ『神』！

心の中でいくら叫んでも加州の耳には届かない。……届いたところで無視されるだけだろうが。

「加州……」

「なに」

「ちょっとトイレに……」

「厠へ行くのは顔合わせが終わってから！」

「ええ……ひどい……」

抗議の台詞はやっぱり無視された。

今さらな説明になるが、刀剣に宿った付喪神を人の姿（刀剣男士）に顕現させる特殊な霊力を持っているのが『審神者』と呼ばれる人間である。

ただ、正式に審神者として活動するには特殊霊力を持っているだけではダメで、政府の教育機関で半年ほどの『審神者研修』を受けなくてはならない。その研修が終わると『本丸』という名の配属先が発表されるのだが、新規で本丸を立ち上げる場合と既存の本丸を引き継ぐ場合との二種類があって、俺は後者の「既存の本丸に赴任」のパターンだった。

研修最終日、その教育機関の小狭い一室で加州清光と引き会わされた。お互いに簡単な自己紹介をして少しだけ会話を交わしたあと、同席していた政府のお役人さんが「じゃあ君はこの本丸で決定ね。あとはよろしく頼むよ第×××５４７８本丸の加州清光くん」と言い、加州が「オーケー！」と答えたことにより俺の行く先が決まってしまった。

今思えば、あんなにあっさり「オーケー！」してよかったのか加州?!　――である。

自分の本丸の審神者を決めるんだよ？　もうちょっと考えてからのほうがよくない？　軽すぎない？？　などと現実逃避で記憶をプレイバックさせていたら、加州が振り返ってまた溜め息をついた。

「あのさー」

「……はい」

「主が不安に思うのもわからないでもないんだけどさ、主がこの本丸やここにいる刀たちと合わないことは絶対にないって言い切れるんだよね」
「そ、その根拠は……？」
「俺が『嫌だ』と感じなかったから」
「ん？」
「ほら、政府機関で顔合わせしたでしょ？　あれね、審神者と刀の相性判定してんの」
「そんな、お見合いみたいな……」
「そう、お見合いみたいなもんだよ。相性が悪いとね、なんかこう、顔合わせた瞬間気分が悪くなるんだ」
「そうなの?!」
「そうなの。俺たち、付喪神よ？　そういう感覚は『人』より鋭いんだよね」
「なるほど……」
「で、俺はこの本丸の代表で主と会ったわけで、代表の俺と相性が悪くないんだから大丈夫！　ってこと」
「へ、へぇ……」
「いやそれ、研修で習うはずなんだけど？」

「記憶にない」
「マジかー……」
「すみません……」
他の審神者の卵たちと一緒に生活しながら受けた研修は約半年だが、毎日毎日休みなく朝から晩まで座学が詰め込まれ、大変密度の濃い日々であった。しかし研修内容が自分の今までの生活には馴染みのない事柄ばかりで、正直、習ったことなどほぼ覚えていない。
男士たちを束ね、指揮し、本丸を維持する重要な立場である審神者がこんな調子だ。いくらなりたてとは言え情けない。
申し訳なさで身も心も縮こまり、その場で蹲りたくなったところで――、
「ま、いっか」
と軽く言った加州は、目の前の障子をスパーンと開けた。

大広間の中央付近に整列し正座していた（とても姿勢よく正座していた……）約五十振りの視線が、一斉にこちらへと集中する。俺の顔の前に垂れ下がっている白い面布を貫きそうなほどの強い視線だ。
――怖ええええよ！

思わず後ずさりしそうになった俺の手首を加州がギュッと握り直す。
「主連れてきたよー」
加州の明るい声がピンと冷たく張りつめた広間の空気を破った。
それを合図にして、男士たち全振りが一斉にがばっと頭を下げた。座礼の最敬礼、いわゆる、土下座だ。
――だから怖ぇって!!
「……え、えーと、今日からこちらでお世話になる審神者です。なにぶんひよっこなので、ご迷惑をお掛けすることも多々あると思いますが、どうぞよろしくお願い致します……」
泣きそうになりながらもどうにか挨拶し終えると、隣で「声ちっさ！」と加州が笑った。

◇　◇　◇

「あのときの主さん、がっちがちで可愛かったよね～」
乱藤四郎が長い髪を弄りながらくすくすと笑う。小学生女児のような見た目の彼に「可

愛い」と言われるのは微妙だが、彼もまた実年齢は千歳近い。
「乱……、その話もうやめない？」
この本丸に来てからすでに一ヶ月が経っているというのに、未だにこうやって審神者就任初日のことを揶揄われる。揶揄われること自体も恥ずかしいのだが……、
「そうだぞ乱！　大将を困らせるな」
「誰だって初めてのときは緊張します」
「主さまがかわいそうです……」
と、厚藤四郎、平野藤四郎、五虎退などの別の短刀たちに次々フォローされるのも居た堪れない。
執務の合間の休憩時間に粟田口の短刀や脇差たちが審神者部屋へ遊びに来て、お菓子を食べつつお喋りするのがこのところの日課となっている。
出陣させる隊の編成、合戦の状況予測、陣形選択等々、緊張を伴うものから日々の内番の割り振りまで、審神者業はかなり雑多で忙しい。短刀や脇差たちとのお喋りはいい息抜きではあるのだが。
「はい、そろそろ休憩はおしまい。主もみんなも仕事に戻ってー」
「えーっ、もう？　僕たち今日は非番だよー？」

「主は非番じゃないのー。今日の分の仕事が終わらなかったら主だけずーっと夕飯食べられないんだよ？　可哀想じゃない？」

居た堪れなさにまごついている俺に助け舟を出してくれたのだと思ったら、加州はわりとガチめなことをガチなトーンで言っている。……え、今日の仕事そんなに残ってたっけ？　と冷や汗をかいた。

「はーい。じゃあ部屋に戻りまーす。主さんお仕事頑張ってね」

「あ、うん。ありがとう乱」

加州の言うことを素直に聞いて短刀たちが部屋を出て行く。帰り際に平野が「お仕事が早く終わりますように」と四葉のクローバーをくれた。……いい子だなぁ平野。……平野の実年齢も千歳近いけど。

「見た目は子どもなのに、短刀くんたちも強いんだよな」

「先代の主の方針で、ほとんどの短刀が極修行してるからね」

「極短刀ね。うんうん、わかる」

この本丸が抱える刀剣の数は他の本丸に比べて少なめだ。加えて短刀が占める割合が多い。刀を鍛刀するのにも維持するのにも審神者の霊力と体力が必要で、大きく打撃力の高い太刀と小ぶりな短刀では要する霊力と体力が違う。先代、先々代の審神者は年配の方だ

ったらしいから、無理のない刀種と刀剣数で本丸を成り立たせていたのだろう。
「ゲームでもさ、極修行した短刀ってめっちゃ強いんだよ。でも練度上げの経験値も手入れ資材も他の刀種より少なくて済むし、とにかく機動がよくて強いから、まず短刀を極にするべきって言われてる」
「あー、俺たちのいるこの世界がゲームになってるんだっけ？」
「うん。そう。実は加州と初めて会ったとき、『うわー、ゲームで見てた加州清光が目の前にいる！』ってテンション上がってた」
加州だけではない。政府機関の施設内では他の本丸の初期刀であろう刀たち――山姥切国広やら歌仙兼定やらの初期刀組――がゲーム内でのビジュアルそのままで普通に歩いていて、しかもそれが複数だったから（同じ刀剣男士が何振りも施設内をウロウロしているのである！）本当に驚いた。
「主はそのゲーム関連で審神者スカウトされたんだよね？」
「そうそう。なんかいきなり『審神者適性判定通知書』とかいうのが政府から送られてきてビビったよ」
俺がこのゲームをプレイし始めたきっかけは、姉がプレイしていたものを見て興味を持ったことだ。

特に日本史が得意だったわけでもないし、刀剣に関心があったわけでもない。ただ、美麗なグラフィックとゲーム内の緻密かつ壮大な世界観にど嵌まりして、かなりやり込んでいたユーザーだった。

そしてある日突然政府から『審神者適性判定通知書』なるものが届き、半強制的に政府のとある機関へと召集された。そこで初めて、このゲームを楽しんでいる人々の詳細なプレイデータが極秘に政府に送られていて、審神者の適性判定の材料となっていたことを知ったのだ。

ちなみにオンラインゲームなどをプレイしそうもない年配の新任審神者が一定数いる理由は、刀剣博物館や美術館への来館者情報もまた政府に送られているからである。そういう場所へ赴くのは、やはり若者よりも年配の方が多い。

「初期刀が『加州清光』のこの本丸に主が割り当てられたってことは――、主の選んだ初期刀が『加州清光』だったってことだよね？」

「うん、まあ、そうだけど」

ある審神者が既存の本丸に派遣される場合、その審神者が選んだ初期刀と元の審神者が選んだ、もしくは顕現させた初期刀が一致していなくてはならない。それは相性的な意味でとても重要なことなのだそうだ。

加州が言った通り、俺が現世のゲームで選んだ初期刀は、先々代の審神者が初めて顕現させた刀剣と同じく『加州清光』だ。（先代、先々代はゲームのプレーヤーではなく、刀剣博物館の常連客で、そこからの審神者スカウトだったらしい）

俺は刀剣についてそれほど詳しいわけではなかったので、初期刀の選択はほとんど直感だった。

「ふふ」

「……なに」

「べーつにぃー。俺、愛されてるなって思っただけー」

上機嫌に目を細めながら俺の手を取って、爪紅で彩られた細い指を組み合わせるように絡めてくる。いわゆる恋人繋ぎというやつだ。初めてこれをやられたときは驚いたけれど、加州清光という刀の成り立ちや性格を考えれば納得できた。

彼は自身を美しく見せることに熱心で、審神者の愛情が自分に向いているかどうかを常に気にしている。現世でのゲームやアニメ等のキャラクター設定は、この世界線の男士にも概ね当てはまっていた。

ただ、あくまでも「概ね」であって、そっくりそのままというわけではない。『本丸』はこの異空間に無数に存在していて、その本丸ごとに特色がある。元は同じ刀剣の付喪神

である男士たちも、見た目は同じだが、顕現した本丸によって微妙に性格が違う。
審神者に就任して一ヶ月と少し。その一ヶ月と少しの間、この本丸の男士たちと一緒に生活しながら、すでに出来上がっている約束事や習慣、男士たちそれぞれの性格、それぞれに割り振られている役目などを覚えた。
厨を預かっているのは主に燭台切光忠や歌仙兼定、洗濯番長は歌仙兼定。馬の世話や畑仕事などは出陣しない本丸待機の男士たちが当番制で行っている。各部屋の掃除は各々がして、共用部分や審神者部屋の掃除も当番制。それは現世のゲームやアニメの『内番』設定とほぼ一致している。差異がそこそこはっきりしているのは性格のほうだ。
作りものであるゲームでの設定と実際の男士たちとの性格の違いをここで挙げていったらきりがないが、戸惑いを覚えるほどの差異があったのはへし切長谷部だった。
「なあ加州、長谷部は『主お世話係』じゃないの？」
「主お世話係？」
加州が切れ長の目を瞬かせながら首を傾げた。
「ここではいつも加州が俺の身の回りのことをいっぱいしてくれてるけど、現世のゲームとかアニメではさ、長谷部が審神者の身の回りの世話をしてることが多いんだよ」
アニメなどでは『主お世話係』に命を懸けているイメージが強い長谷部だったが、俺が

この本丸に来てから長谷部と言葉を交わしたのは数えるほどだ。というか、特別用がない限り長谷部が俺の視界に入ってくることがないのだ。

「もしかして俺、長谷部に嫌われてるのかな？　あんまり話かけてくれないし……、ぶっちゃけ避けられてるような気がする」

「あー……」

「え、ほんとに嫌われてるの?!」

刀剣の付喪神たちは、よほど無礼な真似をしない限り主である審神者を慕う――、これは審神者研修で習ったことであるが、俺は無自覚でなにか長谷部に無礼を働いてしまったのだろうか？

「あ、違う違う、そういうことじゃなくて――……」

加州は少し言いにくそうに目を伏せた。

実際に俺が長谷部に無礼を働いてしまったかどうかは別として（神様に無礼など働いていないと信じたい！）、長谷部が俺となるべく関わらないようにしている理由が長谷部なりにあるんだろう。それを加州から聞いてしまっていいのかどうか迷うところではあるが、長谷部に直接問い質しても話してくれない気がした。

「長谷部の元の持ち主、織田信長が、直臣でない黒田孝高に長谷部を下賜したこと、知っ

てる？」
「うん。それは審神者研修で習ったし覚えてる。でも信長は長谷部を大事にしてたとも習った。それに、黒田孝高から息子の長政に渡って、黒田家代々の家宝だったんでしょ？現世では長谷部、国宝なんだよ」
「でも長谷部にとっては、直臣でもない者に下賜されたってことが引っ掛かってるんだ」
「そういうもん……なのかな」
　黒田家の家宝とされていようが、現世でいくら国宝に指定されようが、長谷部にとっては意味のないことなのだろう。なにがよくてなにが嫌か、それは長谷部が判断することだ。
「長谷部はこの本丸が立ち上がった初期に顕現した男士でさ、今主が言ったみたいな『主お世話係』ってやつだったんだよ、ずっと。すっごく主に尽くしてた。でもさ――……」
「先代も先々代の審神者も、たしか年配になってから審神者になったんだよな……」
　本丸は審神者が元いた世界とは別次元の空間に存在している。四季の移り変わりはあるが、実際には時が止まった状態である。つまり、付喪神である刀剣男士たちはもとより、異空間の本丸で生活している人間の審神者も年をとらないのだ。
　年配の者が新たに審神者に就任した場合、時が経つごとに（この場合、現世での時の流れのことだ）現実世界の身内や知人はどんどんいなくなってしまう。そして自分だけが取

り残されたような酷い孤独感に苛まれ、元いた世界に帰りたくなるらしい。
この本丸の先代、先々代の審神者がそのパターンで、身内や知人たちが死期を意識するほどの高齢となった時点で審神者を引退し、現実世界に戻ってしまった。
長谷部にしてみれば、ずっと尽くしていた主人に置いていかれた、もしくは見捨てられたようなものかもしれない。……それも二度も。いや、織田信長の件を含めるなら三度か。
俺はまだ若者と呼ばれる年齢だ。年老いた自分の姿やそのときの心持ちなど想像できない。若い姿と意識のまま、この先何十年とこの本丸で付喪神たちと生きていくことになる。それがどういうことなのか、まだ実感できていないというのが正直なところだ。でも――。
「加州、長谷部は今日、馬当番だっけ？」
「うん」
善は急げとばかりに立ち上がった俺に引っ張られるように、未だ繋がれていた加州の手が持ち上がる。その手を加州がゆるく引いて、俺を優しく制止した。
「待って主。主が長谷部になにを話すのか俺にはわかんないけど……、少なくとも厩舎でするようなことではないんじゃない？」
「そ、それもそうか」
話をすることで長谷部の中に蟠っているものが少しでも減ってくれれば――とは思った

が、具体的になにを話せばいいかなんて正直俺にはわからない。見当違いなことを言って、長谷部に余計不信感を与えることになったら元も子もないし……。

しかも俺は、自分が重度のコミュ障だったことを忘れていた。

「加州……、俺、みんなと仲良くしたいんだ。嫌な思いをしている男士がいたら助けてあげたい……って、人間が神様にこんなこと言うの、烏滸がましいのかもしれないけど」

「そんなことないよ」

「でも……具体的にどうしたらいいかわからない」

「特別なことは必要ないと思うよ。仲良くしたいって、主の言葉で伝えればいいんだ」

「それだけ？　それだけでいいのかな？」

「俺たち付喪神だって言ったでしょ？　『人』より感覚は鋭いんだ。主が本気で俺たちのことを考えて言ってくれる言葉は、絶対、ちゃんと伝わる」

加州の言っていることに根拠はない、ないけれど、神様の言うことなのだから信じていいのだろう。――信じるべきだ。

繋がった手から、なにやら温かいものが流れ込んできて体内に満ちていく。これが神様の『気』というやつだろうか。なんとなく自信が湧いてくる。

「じゃあ加州、長谷部に伝えてきてくれる？　馬たちの世話が終わったあとでいいからこ

こに来てって」
「ん。わかった」
にこりと微笑んだまま加州は俺を見つめている。顔の前に面布を垂らしているので加州には俺の顔は見えないはずなのだが、時々、些細な表情の変化まで見透かされているような気がして無性に気恥ずかしくなることがある。
微笑んでいるからお小言ではないんだろうけど、まだ他にもアドバイスのようなものが続くのかと思って待っていたら、繋いでいた手をぐいっと引かれた。勢い俺は、座っている加州のほうに倒れ込んで抱き留められる体勢になる。
「か、加州?!」
「一緒に生活してまだひと月とちょっとだけど、俺ね、主のこと大好きだよ。政府機関で顔合わせしたときの俺の勘、間違ってなかった」
加州の甘い声が耳に優しく響く。俺の鼓動が駆け足を始めて、息が苦しくなる。でも、放してくれ、とは思わなかった。
神様だけど顕現している加州の姿は男で、俺も男で、同性同士でこの行動と反応はおかしいなとも思うけど、嫌だとは感じないのだ。
恋人繋ぎも、ハグも、こういう愛の告白みたいな台詞も、嫌ではなくて嬉しい。

刀剣の付喪神たちは、よほど無礼な真似をしない限り主である審神者を慕う――、これは逆も然りだ。

審神者だって無条件で自本丸の男士たちのことを好きになるのだ。

「お、おお……」

俺の返事は物慣れなさで上擦って、耳元で加州がくすりと笑った。

夕飯のいい匂いが本丸中に漂い始めた頃、長谷部が審神者部屋にやって来た。

今日は馬当番の他になにをしていたのかという俺の軽い問いかけから始まって、その日一日の行動報告をぽつりぽつりと長谷部が口にする。

出陣や遠征の予定も、その編成も、大体がそのときの近侍と話し合うことで、近侍でもない特定の男士を呼び出してする話ではない。今のこの場の空気は、休憩の合間に加州や短刀たちとするような世間話が似合う空気でもなくて、話題は早々になくなり、俺たちの間に沈黙が横たわる時間が長くなった。

それでも長谷部がこの気まずい時間に付き合ってくれているのは、自分と俺との距離感

が不自然だと長谷部自身が思っているからだろうし、それに俺が気づいているとわかったからだ。

俺が思っていること感じていることを素直に伝えればいいと加州は言ってくれたが、それにしてももう少し考えをまとめてから呼ぶべきだったと猛省していると、突然、二十畳ほどもある審神者部屋に満ちる張りつめた空気を破るように長谷部が口を開いた。

「主、俺はなにか、お叱りを受けるようなことをしましたか？」

「え?!　してない、してないよ！　むしろ俺のほうが長谷部を怒らせるようなことなにかしちゃってたのかなって、ずっと思ってたんだよ！」

「いえ。決してそのようなことはございません」

長谷部はきっぱりと否定した。険しい表情に見合った硬い声音だ。長谷部は俺に怒っているわけでも俺を嫌っているわけでもないと前もって加州が教えてくれていなかったら、俺はきっとここで怯んでしまっただろう。

「あのさ長谷部、とりあえず敬語やめない？」

「それは……ちょっと」

「そっかー……」

どうすれば心を開いてくれるだろうか。その道の専門家でもない俺にトラウマの癒し方

などわからない。――いや、ほんのひと月あまりで、彼の心中に踏み込もうとすることがそもそも無謀なのだろうか。

おもむろに俺は顔の前に垂らしている面布を外し、姿勢を正して長谷部と向き合った。

思いもよらなかったであろう俺の突然の行動で、長谷部の目が大きく見開かれる。

「あ、主っ、一体なにを?!」

「表情もわからないやつの話、信用できないかなって思って」

「しかし――」

「いちおういつも着けてるけどさ、別にこれ強制じゃないし、いいんじゃない?」

俺は面布を指先でつまみ上げ、顔の横でひらひらと振った。

『審神者は顔を持たず、名を持たず、ただ男士を束ね、これに令する』は、審神者研修でまず習い、本丸運営において推奨されることだ。

要するに、刀剣男士とは必要以上に馴れ合わず、極力私情を挟まず、時間遡行軍と戦わせろ――ということなのだが、あくまでも「推奨」であって「強制」ではない。

「研修では、なるべく私情を挟まず刀剣男士と接するべきって教えられた。でも、人間の歴史を守るために命懸けで戦ってもらうのに、それはちょっとないんじゃね？　って俺は思ってた」

瞬きもせず長谷部はじっと俺を見つめている。時折俺に向けられる、すべてを見透かすような男士たちの強い視線に気後れしてしまうことも多いけれど、今は俺の本心がそのまま誤解なく伝わればいいなと思った。……俺は言葉があまり上手くないから。

「一緒に生活している限り、どうしたって情は湧くだろ？　男士たちにとって、審神者にそういう情を持たれることは迷惑なのかな？」

「迷惑だなんて、とんでもない！」

長谷部が焦ったように声を上げた。

先代、先々代の審神者も、当然男士たちに特別な情は持っていたと思う。ただ、現世で過ごした時間のほうがこの本丸で過ごした時間よりも圧倒的に長かったから、現世への未練に心の天秤が傾いてしまったのだろう。決して男士へ向ける情が薄かったり軽かったりしたわけではないのだ。長谷部もそれは理解していたと思うけれど、頭で理解できても感情が納得するかはまた別の話で。割り切れなかったのもわかる。生真面目で厳しく見えて、その実情け深い長谷部にとっては簡単に癒えない痛手となってしまったのだ。

俺にも現世に家族や友人がいる。たかだか二十年ほど過ごしただけの世界だが、あちらでの記憶や思い出を綺麗さっぱり捨て去ってこちらに来たわけではない。この先永遠に、この本丸で男士たちとともに過ごす覚悟を今ここで示せと言われても、正直明確な術はな

いけれど――、俺がここで必要とされているうちは、俺ができることを精一杯やっていきたいと心から思っている。

刀剣男士たちからしてみれば赤子にも満たない若造の言葉など薄っぺらいだろうし、気恥ずかしいので口にはできないが……。

「俺はデキのいい審神者じゃないけど、どの刀も折れることがないように努力する。そのためにもみんなのことをよく知りたい。だから加州と同じぐらいこの本丸のことに詳しい長谷部にも手伝って欲しいと思う」

今俺ができることは男士たちの信頼を得ること、そのための努力をすることだけだ。

「お願いします」

床に手をついて、額もつくくらいに深く頭を下げた。

頭上で長谷部が息を呑む気配がする。

「――主、どうか頭を上げてください」

先ほどまでよりも幾分柔らかくなった声に促されて顔を上げると、仕方ないなと言いたげに苦笑いをしている長谷部と目が合った。

「えーと、協力してくれる？」

「この身が折れ鋼の塊に返るまで、誠心誠意お仕えさせていただきます」

「じゃあ、ずっとだね」
「はい」
この本丸に来て初めて、取り繕わない長谷部の自然な笑顔を見た気がした。

――◆――

いつもより遅くなった夕餉をとったあと風呂を済ませ、庭に面した長い縁側を自室に向かってゆっくりと歩く。昼間にはもう汗ばむ日もあるけれど、陽が落ちて宵の口を過ぎれば気温はぐっと下がる。少々長風呂をしすぎて火照った頬を、涼しい風が撫でて冷ましてくれるのでちょうどいい。
あと少しで自室に着くかというところで、部屋の前の縁側に座っている者の姿が見えた。
「なんの用だ」
名を呼びかけることもせず、やにわに用件だけを訊く。
長谷部のこの不躾な態度にも慣れている刀、加州清光は、庭先に向けていた視線をゆっ

くりと長谷部に移した。
「夕方、主となにを話したの？」
「おまえには関係ないだろう」
「いやいや、関係おおありでしょ。『長谷部に嫌われてるかもどうしよう～！』って主に泣きつかれちゃった身としては、どうなったのか気になるし」
舌打ちしたくなるのを堪えて長谷部は髪をかき上げた。
現在、主の身の回りの世話はほぼ加州がしている。主が長谷部と話をしたがっていると言われた時点で、それを加州が長谷部に伝えに来た時点でこうなることは予想がついていた。関係ないと突き放してみたのはいちおうのポーズだ。
「この本丸で上手くやっていくために、俺にもいろいろと協力して欲しいと言われた」
「ふうん？」
「だから、俺ができる限りのことは致しますとお答えした。それだけだ」
「へぇー。それで今日の夕飯は主の隣りだったんだ？　笑いながらお喋りなんかしちゃってさー。拗ねてずっと主を避けてたくせに、変わり身早いじゃん。……あ！　今の主のお世話をするのはこれからも俺だからね！　今さら代わってあげないから！」
「拗ねてなどいない。というか、牽制などしなくてもそんなことはわかっている」

「ならいいけどー」

拗ねていたなどと認めはしなかったが、加州の言う通り、今代の主に対するこれまでの長谷部の態度は褒められるようなものではなかった。

主を慕い、尽くし、命じられるままに動くのは刀の性だ。その性に従って、長谷部は先代、先々代の主と接してきた。

たとえ主が審神者の任を辞して現世に戻ったとしても、それを裏切られたなどと考えるのは筋違いであり烏滸がましいことである。わかってはいても、先の主たちに本丸から、言うならば自分のもとから去っていかれたときの失望感は筆舌に尽くしがたかった。

人の身を得てそこそこの年月は経っていても、人の『心』の有り様を完全に把握し制御できるようになったとは言いがたい。先の主たちのことが痛手になったのは事実で、自分の勝手で今代とは距離を置いてしまっていた。

新しい環境で審神者という特殊な任をこなさればならず、不安や精神的重圧も大きかったことだろう。加州という心強い支えがあったとは言え、いつまでも打ち解けぬ自分のような刀にも気を配らねばならなかったのだ。主のこれまでのご心痛を思うと申し訳なさで身が竦む。

「今代の主がここにいらしてから、おまえが一番主の身近で仕えていただろう。今さら俺

がそれに取って代われるとは思わないが、主が主の力を充分に活かせるよう、そして快適に過ごしていただけるよう、これからは俺も全身全霊でお仕えするつもりだ」

「それが重いっつーの……」

「気軽に、が出来ない性分でな」

加州が呆れたように溜め息をつく。四角四面な性格であることは自覚している。それは今さら変えようがない。

「でもさー、前の主たちのように、今の主も現世に帰りたいって言い出す日が来るかもしれないよ？」

「ああ……」

「そうしたら長谷部はどうするの？」

「どうするもなにも、それは主が決めることだ。俺たちにはどうもできないだろう」

先代、先々代の主たちのように、今代の主もいつかこの本丸を離れたいと思うかもしれない。

正直、そうなる可能性のほうが高い。家族も友人も身近にいない、現世から隔絶した異空間で生きていくことは容易ではないからだ。

人の身を得てはいても本来『刀』である刀剣男士たちが、元から『人』である審神者と

物事の認識を完全に共有することは難しい。特に時間という概念は刀にとって最も理解しづらいもので、自分たちにとってさほど重要でない数十年、数百年という時間は、審神者にとっては貴重で重い意味を持つ。

「現世への想いは、そう易々と捨てられるものではないだろうからな」

「それはそうかもしれないけど――」

加州は長谷部に向けていた視線を庭先に戻し、縁側から下ろしていた足をゆらゆらと揺らした。

「俺はさー、前の主たちのことも好きだったけど、今の主が一番好きなんだ」

比較するのも烏滸がましいが、今代の主は年が若い分、確かに前の主たちより親しみやすい。人付き合いが苦手だと言っていたが、本丸の男士たちと打ち解けようと一生懸命努めてくれている。だから加州がそう言うのもわかる気がしたし、実際、皆にも慕われているのだ。このひと月あまりで、多くの刀たちに主が囲まれている場面をよく目にするようになった。

秘密を打ち明けるように、「だからさ」と加州は続けた。

「元の世界を思い出す暇がないぐらい、帰りたいって思えないぐらいに主を愛して、俺たちを愛してもらえばいいんじゃない？」

「……たわけたことを」
「それがだめなら監禁してでも薬盛ってでも、とか」
「物騒なことを言うな」
再び長谷部のほうを向いて、加州がにやりと笑う。
「長谷部だって、ほんとはそうしたいって思ってるくせに」
ああ……、それができたらどんなにいいか――。

第二章　神気交換　　燭台切光忠

立夏の頃、朝の澄んだ空気の中に鈴の音が響き渡る。
シャンシャンシャンと三回、規則正しく鳴らすのは長谷部、二回で済ませるのが加州、延々鳴らし続けるのは次郎太刀だ。もっとも次郎太刀が鈴を鳴らすのは朝ではなく、出陣や部隊帰還を知らせる本来の用途でもなく、飲み会開催の合図であることがほとんどなのだけれども。まあそれは今置いておいて。
起床時間を知らせる今朝の鈴の音は四回。初めてのパターンだったから、麻縄を振ったのは誰だろうと思いながら押入れに布団をしまった。
「主おはよー。起きてる？」
加州が部屋の外から声を掛けてくる。
「おはよう加州。起きてるよ」
俺が答えると、開いた障子の隙間から加州がひょこりと顔を覗かせた。そして、爽やかというよりは艶やかな笑顔を浮かべながら俺の着替えを手伝ってくれる。白衣に袴が審神

者の普段着だが、本丸就任初日からずっと加州が着付けてくれているので、ここに来て約二ヶ月経った今でも俺は自分ひとりで着替えができない。
「なあ加州、そろそろ着替えぐらいひとりでするよ」
「却下」
「なんで？」
「なんででも」
　このやりとりももう片手で足りないほどにはしているが、加州の返事は毎回にべもない。朝から押し問答をするのも疲れるのでこれで流すけれど、新人審神者で本来の任務がまだ満足にこなせていないのだから、せめて自分の着替えぐらい自分でさせてくれというのが本心だった。
「あのさ、今朝鈴を鳴らしたのって誰？」
　さっき少しだけ気になったことを何気なく訊くと、加州は数秒首を傾げて「長谷部だよ」と答えた。
「え、長谷部？」
「そんなに驚くこと？　朝はだいたい俺か長谷部でしょ」
「だって長谷部はいつも、キビキビと三回鳴らすじゃん。でも今朝のはなんとなく……の

んびりっていうか、気怠そうな鳴らし方だった」
「あー、疲れてるんじゃない？」
「……朝から？」
「日頃の疲れが溜まってるって意味で」
俺が審神者に就任してから約二ヶ月。俺が仕事に慣れるまでは、比較的難易度の低い合戦場への出陣、無理のない遠征計画を組んでもらっていたはずだ。
「え、でも、そんなに無茶な予定は組んでないよね？　先代の審神者のときよりもまだ頻度は少ないだろ？　それでも疲労が溜まるの？」
「頻度はあんまり関係ないかな。神気交換もせずに出陣やら遠征やらをしてるから、当然活力切れにもなるんだよ」
「神気……交換？」
初めて聞くものではないが、聞き慣れてもいない単語が耳に引っ掛かった。
「研修で習わなかった？　結構大事なことなんだけど」
「……いや、習ったことは習った、と思う。でも、その単語と単語の意味だけ教わって、それがどういうものなのかの具体的な説明はされなかった」
「指南書には？」

「詳しくはなにも書かれてなかったような」
「マジかー……」
研修中に使っていたテキストを書棚から引っ張り出してきて、当該ページを開いて見せる。
『神気交換とは、刀剣男士たちの神気と審神者の霊力を交換することである』
俺の記憶通り、そこには「神気交換」という単語の意味だけが載っていて、具体的な交換方法などは書かれていなかった。
額に手を当てて、「適当すぎんだろ」と呆れたように加州が零す。
「出陣の編成とか遠征計画を立てることは審神者の重要な仕事だけど、神気交換も審神者の大事な仕事なんだよね」
刀剣男士たちが戦うためには神気が必要で、その神気は審神者の霊力をもとに練り上げられる。簡単に言うなら、審神者の霊力は男士たちの体を維持し動かすエネルギーの素だ。人間は食事からエネルギーを摂取するだけでいいが、男士たちは食事をしただけではダメで、審神者から霊力を受け取ってエネルギーに変換しなくてはならない。そうしないと本来の力が出せないのだ。……それは研修で習って知っていたはずなのに。
「そ、そうだよな。人間にはない特殊な力で遡行軍と戦ってるんだもんな……」

しかし俺は、自分の霊力を男士たちに渡す方法を知らない。そして「交換」というくらいだから、男士たちの神気も審神者にとって必要なものだろうに。
「えっと、ごめん。男士たちには審神者の霊力が必要だってことは研修で習ったのに、今までそれについてちゃんと考えたことなかった。でも俺、神気交換って具体的にどうすればいいのかわからないんだ。教科書にも書いてないし」
「んんーー……。審神者によって方法は変わるし、確かにあれは、指南書に細かく書けるようなことでもないっちゃないしなぁ……」
「と言うと？」
「審神者が幼すぎる場合、若者の場合、年配の場合、で神気交換の仕方が変わるんだよ。若者でもその審神者の方針でまた変わる。主がどうするかは主が決めるしかなくて――」
「加州、回りくどいよ」
「まあ性交するのが一番効果があって手っ取り早い」
清々しい朝の空気にはあまり相応しくない単語が耳に飛び込んできて、俺は目を瞬いた。
「なんて？？」
「ま・ぐ・わ・え、ってこと」
「……え？　誰と誰が？？」

「主と俺たち」
「は……？」
性交？　まぐわう？？
つまりはセ…、セックスしろってことか?!　俺と男士たちで?!
絶句した俺から加州はついっと視線を逸らした。

げんなりした気分で朝食を済ませ、俺は早々に審神者部屋へと戻った。
食事中、長谷部や燭台切光忠には元気がないとめちゃくちゃ心配されてしまった。そりゃ、あんな衝撃的事案を告げられた直後で元気いっぱいでいられるやつのほうが少ないと思う。……彼らには言えないけど。
というか長谷部、おまえのほうが霊力不足でスタミナ切れてるんだろ――、と思ったら長谷部の顔がまともに見られなくてちょっと挙動不審になった。……ごめん長谷部。
しかし！　だ。いくら受け入れがたい事案であろうとも神気交換が審神者の重要な職務であることは事実なわけで、やらずに放っておくわけにもいかない。今のところ審神者の

俺には神気不足による不具合は起きていないが、現に霊力不足で活力がなくなっている男士がいるのだ。それが原因で戦いや遠征に支障が出て……、最悪、刀剣破壊なんてことになったら――。

「由々しき事態じゃん！」

「え、なに、突然？？」

「刀剣破壊なんて絶対にさせないからな!!」

「いきなり物騒なこと言わないでよ！　怖いよ！」

俺の隣りで内番の割り振りを確認していた加州が、不穏な単語に怯えて後ずさる。

「よし！　神気交換！　するぞ！」

「ちょ、声大きいってば主！」

意気込みすぎてかなりの声量になってしまったが、誤解しないでいただきたい。男士たちと性交するのは断じて俺自身の性的欲求からではない。「仕事」だからするのだ。男士たちに霊力を分け与えるための俺の大事な仕事だからだ。

加州の顔色は真っ青になったり真っ赤になったりと忙しい。

あとから聞いたことだが、このときの俺の「神気交換するぞ！」発言は、本丸裏手の厩舎にまで響き渡っていたそうである。

やばい。恥ずかしくて死にそうだ……。

「えっとつまり、顕現している刀剣男士全振りとする必要はないってことなんだな？」

そうそう、と頷く加州を見て、深く長い安堵の溜め息が出る。

「短刀くんたちなんて、実年齢はともかく見た目は子どもだから、そんなことするの俺絶対無理だと思ったもん」

「そうね」

加州も苦笑いしながら溜め息をつく。

しかし短刀や脇差たちも神気交換が必要ないわけではなく、交換方法が「性交」でなくてもいいだけということだった。例えば俺と手を繋いだり、そばでお喋りをして過ごしたりするだけでいいらしい。鍛刀や手入れに必要な資材が少ないのと同じで、審神者の霊力も少なくて済むのだ。休憩時間など、審神者部屋に短刀や脇差たちがいるのが当たり前だった。それで充分霊力を受け取れていたらしい。……だから元気なままだったのか。いいことだけど。

「問題は打刀以上の刀なんだけど――」

「あ、はい」
「朝言ったけど、ソレをするのが一番効果的で手っ取り早いのは事実。でも、これも言ったけど、審神者によって方法は違う。だって子どもの審神者とか高齢の審神者にはちょっと無理でしょ？」
「だよな」
先代や先々代の審神者は年配の方だった。刀種や刀剣所持数が他の本丸よりも控えめで、鍛刀や出陣回数も少なめだったのはそういう理由もあったからなのだろう。
「前の主たちは基本的に、刀たちと一緒の部屋で寝るって方法をとってたよ。えーと、普通に『添い寝』とか『並んで寝る』ってほうね」
「ちょ、ちょっと待って、添い寝でいいなら――」
「よくないって言ってんじゃん」
まぐわわなくてもいいじゃないか、は最後まで言わせてもらえなかった。冷ややかに、きっぱり、ばっさりだ。
「なんでだよぅ……」
「効果が全然違うの！　添い寝じゃ、よくて赤疲労が橙疲労に戻るぐらい。ちゃんと神気交換したら赤疲労が一気に桜が舞う状態にまで回復する。負傷もしにくくなる。だから前

の主たちは大きい刀種たちがなるべく疲労状態になったり負傷しないように、難易度の高い合戦場には極短刀しか出陣させなかった」
「な、なるほど」
そこまで言われたら、もうこれ以上抵抗するのも申し訳ないというか……、俺が駄々を捏ねているだけのようなので口を噤まざるをえない。いよいよ腹を括るしかないのだ。
「もう、ソレをするしかないってことはわかった。俺も男だ。俺は俺の責務を全うする」
某人気漫画の人気キャラクターの台詞を借りてみたが、内容が内容だけに、いまいち格好がつかなかった。続く言葉も情けない。
「それで俺は、なにをどうすればいいんだ？　ぜんぜんわかんないぞ」
「んー、まずは相手と順番を決めるべきかなー」
「あいてと……じゅんばん……？」
「大奥様式を採用してもいいんだけど、主、自分で相手を選んで、自分で呼べる？」
「無理です！」
俺は即答した。男はもちろん、女の子とも付き合ったことがないのに「今夜俺とセックスしましょう」なんて自分から言えるわけないじゃないか！　コミュ障なめんな！
予想通りの答えだったらしく、加州は慌てることなく続けた。

「だから『希望制』にすればいいと思うんだ。なんか力が出ないな〜って思った刀が『神気交換願い』を提出する」
「……シュールだな」
「文句言わない！」
「文句じゃないよ！」
しかつめらしい顔を（と言っても俺の顔は面布に隠れて見えないのだが）突き合わせて、話していることは下ネタである。それこそシュールだ。……いや、大事な任務だけども！
結局その日の昼間はほとんど仕事ができなかったにもかかわらず、徹夜明けにフルマラソンするぐらいに消耗した。主に精神的に。

霊力不足を自覚した刀は『神気交換願い』を提出すること――と、加州にさり気なく言い広めてもらうことになって数日。
この数日間、気まずげに俺から目を逸らす男士（何度も言うようだが俺の顔は面布で隠れているので視線は合わないはずである）、生温い笑みを向けてくる男士（それどういう

感情の笑顔？）、頬を染める男士、「受け付けはいつから？」と明け透けに訊いてくる男士等々、反応は様々であった。わりと居た堪れない。

そして今日、今夜！　俺は初めての神気交換をすることになっている。

相手の刀は……、伊達者だし、この本丸で一番色事に詳しそう、且つ、スムーズに事を済ませてくれそう――という偏見に満ちた理由で選ばれた。実際がどうかは本刀に訊いてみたわけではないので不明だ。

ちなみに、「初めての相手」については加州と俺とで十時間ほど話し合った。

え？　もっと有意義な話し合いをしろ？

はぁ?!　俺のハジメテを捧げる相手の選択が無意味だとでも?!

六畳ほどの寝室は、廊下に面した執務室の奥側に位置している。審神者部屋がもともと本丸内の入り組んだ廊下の最奥にあるので、広間や刀たち各部屋の物音や声はここまで聞こえてこない。

亥の刻（現在の21～23時）に入ったばかりでまだそれほど遅い時間ではないにもかかわらず、寝室内はまるで真夜中のような静寂で満ちている。行灯の蝋燭が燃える微かな音

が、自分の心音が、はっきりと聞こえてしまうぐらいに。
薄暗い寝室の中央には、綿がいっぱい詰まって豪奢な刺繍が施された布団が敷かれていた。寝室には物がほとんどないので、その布団がやたらと存在を主張しているように感じる。行灯の淡い光が妖しい雰囲気を増幅させ、所在無さと居た堪れなさが同時に俺を襲う。
さて、布団から離れたところに正座してどのぐらい経っただろうか。そろそろ足が痺れそうだと思っていたところで、ほとほとと襖を叩く音がして鼓動が跳ねた。俺の身動ぎに合わせて蝋燭の炎も揺れる。
「……どうぞ」
上擦る声で俺が応えると、静かに襖が引かれ、黒いシルエットが部屋の中にするりと滑り込んできた。漆黒の髪、大きながたいを黒い浴衣に包み、音を立てない歩き方は黒豹を連想させる。
「君、なんでそんな隅にいるの？」
燭台切光忠がくつくつと小さく笑いながら寄ってきて俺の目の前に立った。
「隅のほうが……なんか落ち着くから」
「ふうん？」
仄暗い灯りで光る金色の隻眼がじっと俺を見下ろしている。

「……なに？」
「いや、君の顔、初めてちゃんと見たから」
刀剣男士たちは皆揃いも揃ってイケメンなので、自分の凡庸な顔を晒すのは少々恥ずかしい。隠していてもいいのなら隠していたいのだが、こういう場面でそれが適切なのかはわからない。
「面布してたほうがいい？」
「え、なんで？　これから全裸になるのに面布だけまた着けるの？　おかしいでしょ」
「いっ、言い方！」
今度は声を上げて笑いながら、燭台切が俺の隣りに並んで座る。嗅ぎ慣れない石鹸の香りが鼻腔を擽った。
「燭台切、なんかいい匂いする。浴場に置いてあるのじゃない石鹸使った？」
「ふふ。特別なときのための、とっておきの石鹸だよ。いい香りでしょ？」
「うん」
俺の肩に燭台切の手が掛かり、引き寄せられて、燭台切の首筋に顔を埋める格好になる。
うわ、自然と肩を抱いて引き寄せやがった！　やっぱり燭台切は伊達男だ！　慣れてる！

加州、俺たちの選択は間違っていなかったぞ――、と脳内の加州に報告していると、燭台切は俺の頭や肩をゆるゆると撫でた。彼の大きな手を覆っているいつもの黒い手袋は外されていて、手の平の熱が浴衣越しに伝わってくる。

落ち着いているように見えるけれど、実は燭台切も平静ではないのだろうか？　「特別なとき」と言っていたし。

そう考えたら、ああ、俺は今から燭台切とイロイロするんだ……と実感して、鼓動が駆け足を始め、体温もまたじわじわと上がった。頬が熱い。

「それで、君はどっちを希望する？」

「……どっち、とは？」

質問の意味がわからなくて燭台切の顔を見上げると、彼は艶やかな笑みを浮かべながら露骨な台詞を続けた。

「挿れるほうと、挿れられるほう」

「生々しいな?!」

「ごめんごめん。でも大事なことでしょ？」

そりゃそうだけども！

どちらがいいとか、そんなの俺が選べるか！　と叫ばなかった自分を褒めたい。

「あのですね、元の世界での俺の恋愛対象は女の子でした。ちなみに人見知りとコミュ障が大層高い壁となりまして、女の子と付き合ったことはおろか、ろくに話もしたことがありません」
「つまりは童貞なんだね？」
「もっとオブラートに包んでよ！」
俺の抗議はさらりと流される。審神者の言葉を無視するとかおまえ、いい度胸だな?!
悪態は腹の中で湧いてくるが、どういうわけか口からは出て行かない。
「そっか。じゃあ、僕が挿れるほうでいいかな？　初心者の君に任せて僕のお尻が大惨事になることは避けたい。手入れ部屋ですぐに治るとは言え、痛みはちゃんと感じるからね」
「はい。承知致しました。ていうかそういう怪我も手入れ部屋で治るの？」
「治るんじゃない？　試したことないけど」
と、整った顔を甘い笑みで綻ばせる。男の俺でも思わず見惚れてしまう美麗な顔だ。
くそう。色男ほんとムカつく……と腹の中でまた密かに憤慨していたら、知らない間に布団の上に横たえられていて、俺は燭台切を見上げる体勢になっていた。彼の肩越しに天井が見える。
あれ？　ちょっとこれ、いつの間に？？

「君は僕のことが嫌い？」
「いえ。燭台切光忠は備前長船の祖でありかの伊達政宗公が大層愛した名刀で機動は少々遅いですが各ステータスは太刀の中でも優秀な刀です。打撃が特に素晴らしいですね。嫌うなんて滅相もない」
ノンブレスで言い切ると、燭台切は苦笑いしながら人差し指の背で俺の頬を撫でた。
「そういうことじゃなくて」
熱を移すように、彼の親指が俺の下唇をゆっくりとなぞる。
「しょ、燭台切……」
喉が震えて、名を呼ぶ声が掠れて萎んだ。
「こういうときは『光忠』って呼んで」
「いや、おまえなんでこんなに手慣れてるんだよ」
「あはは」
「笑い事じゃないよ！　万屋のお姉さんとかに手を出してないだろうな?!」
「出してないよ」
「でもっ――」
「もう黙って」

言い募ろうとした言葉は唇が塞がれたことで出口を失って、喉の奥に消えて行った。薄く開いていた唇の隙間から、燭台切の肉厚の舌が滑り込んできて俺の口内を動き回る。

他人の唇がとても柔らかいこと、舌の温度が剥き出しの肌よりも熱いこと、柔らかい粘膜を撫でられると擽ったいこと、でも気持ちいい場所もあること――を、俺は今、いっぺんに知った。

刀相手のキスでもファーストキスって言うのかな？　と、脳が現実逃避をする。

「ん……んっ」

甘ったれた声が鼻から抜けて、深く重なった唇からくちゅくちゅといやらしい水音が響く。耳を塞ぎたいのに、俺の両手は縋るように燭台切の腕を掴んでいた。

「手はこっちがいいな」

燭台切の首に腕を回すように促されて従ったら、抱き合う形になって接触する部分が増えた。

繰り返し触れ合う唇から、密着した肌から、熱いなにかが俺の体内にどっと流れ込んできて体温がぐわりと上がった気がした。

「ね……っ、なに……これ」

「ん？」

少し離せと念じても燭台切の首に回した自分の腕がまったく言うことを聞かないから、頭を振って、断続的に結ばれる唇を解いた。燭台切の顔が滲んで見えるのは、俺の目が潤んでいるからだろう。

「しょく……だいきり」

「光忠、だよ」

「みつただ、……これ、なんか俺に流れ込んでくるの、みつただの神気？」

「うん。そう」

「すご……、あつ……い」

「イヤ？」

「……や、じゃない。気持ちいい……けど」

全身が熱くて、頭の芯がじんと痺れている。今までに経験したことのない感覚だったが、満たされている感じがとても心地良かった。

「みつただは？　俺の霊力、受け取れてるの？」

「うん。君の霊力はとても甘いね。お腹いっぱいもらってもいい？　僕の神気もいっぱいあげるから」

「ん。いい…よ」

このときはもう、まともに物が考えられなくなっていて。神気をいっぱいもらって気持ちよくなれることを体が期待した。神様に求められているのも悪い気がしなくて、首に回した腕を引き寄せるようにして自分から彼の唇をねだった。

「あ……っ、ん……んっ」

腰を高く持ち上げられるようにして、後ろから燭台切を受け入れている。

正気のときなら耐えられないようなこの格好も、快感で頭の芯が痺れているような状態では気にならなかった。それどころか、この体勢のほうがより深く燭台切と繋がることができて体が喜んでいるのがわかる。

男同士の行為が簡単でないことは知識として知っていた……が、初めてとは思えないぐらい、俺の体はなんの抵抗もなく、痛みもなく、燭台切を受け入れることができた。燭台切が上手いからなのか、彼が神様だからか、その両方か。知る由もないが、ともかくも、俺の内部は今、嬉しそうにぐにぐにと彼の性器を食んでいる。

抜ける寸前まで腰を引いて、またゆっくりと奥へと戻って来る。彼の性器の大きく張ったエラの部分が、俺の気持ちのいいところを余すことなく刺激しながら肉筒を出入りする。

その出入りに合わせて粘着質な水音が響き、もう何度注ぎ込まれたのかもわからない彼の精液が結合部分から溢れて太腿に伝う。お互いの体も、体の下に広げて敷いていた浴衣も俺たちの体液でぐちゃぐちゃで酷い有り様だった。……それを気にしている余裕などなかったけれど。

「みつただ……、またっ」

ゆるゆるとした律動を次第に速められて、切羽詰った声が俺の口から零れる。

「イキたい？」

「い…きたい」

「オーケー」

俺の腰を支えるように掴んでいた燭台切の手が性器に絡んで、彼の抽挿と連動して強く扱かれた。

「はぁ、あっ……、んっ、ああっ！」

後ろと同時に前にも快感を与えられ、俺は堪えきれずにまた熱を吐き出す。何度吐き出したのか自分でも覚えていないが、水のような薄い液体が鈴口から勢いなくたらたらと零れるだけだった。吐精で後ろが強く収縮したのに合わせ、燭台切も俺の中に熱を放つ。神気が再びどくどくと注ぎ込まれて全身が快感で震え、痺れた。

感覚が過敏になりすぎていて、小さく痙攣し続ける俺の体を燭台切が宥めるようにさすってくれるその刺激すら辛い。そんな状態にもかかわらず、俺の体は彼の神気をもっともっとと欲しがっている。まったく際限がない。
「みつ…ただ」
「なに？」
「これ……、きりが……ない」
「君が欲しいだけあげるよ？」
「だめ。……もう、しんじゃう」
燭台切が俺の背後で小さく笑いながら溜め息をついた。
「……ほんとうに、君は。可愛いねぇ……」
女の子に掛けるような甘ったるい彼の言葉にも反応して体が喜ぶ。
顔を見ながらしたいと言われて、今度は向かい合うように体勢を変えられた。
「じゃあ今夜はこれで、おしまいにしようか」
もう無理だと音を上げたのは俺のほうなのに、おしまいと言った彼の言葉で泣きそうなぐらいさびしくなった。情緒も、体の感覚も、随分とおかしなことになっている。
しかし燭台切が激しく腰を動かし始めたことでそちらに意識がとられてしまって、俺の

口からはまた喘ぎしか出てこなくなった。
「うっ、ああ……んっ、ああっ！」
「っ……！」
腰の奥から大きな熱がせり上がってくる。堪えることもせずにそれを吐き出して、俺の後孔は中の屹立をぎゅうぎゅうと締めつける。それに合わせるように、燭台切も俺の最奥をガンとひとつ強く突いて射精した。注ぎ込まれた彼の熱くて甘い神気が、じわじわと俺の全身に浸透していく。
「主、大丈夫？」
そう言いながら燭台切が俺に口づけたところで、意識は途切れてしまった。

寝室奥の小窓から差し込む朝の陽の光を瞼越しに感じて、俺はぱちりと目を開けた。近年稀に見る爽やかな目覚めだ。
布団を畳んで押入れにしまっている間に、起床時間を知らせる鈴の音が聞こえてくる。最近の鈴の音は気怠げに四回で定着していたのに、今朝の鈴の音はキビキビと二回。同

じ二回でも加州のそれとは微妙に違うなぁと思いつつ執務室へ入り、文机に頬杖をついて俺は加州を待っていた。
「主おはよー。起きてる？」
「おはよう加州。起きてるよ」
俺の返事と同時に障子が引かれ、そこから覗いた加州の顔が途端に苦々しく顰められる。
「なに、どうした？」
「……廊下にいても感じたけど、燭台切の神気がすっごい残ってて、正直引く」
「えっ?!」
ゆうべの情事（いや、仕事だけど！）の気配が色濃く残っているということだろうか。羞恥で一気に火照った顔が面布に隠れていてよかった……と思ったのも束の間、「照れられると余計に引く」と辛辣な台詞を続けられて泣きたくなった。やはり刀剣男士たちは、神様の特殊能力で面布で隠れた俺の表情や内心まで見透かしてしまうのだ。
「そんな特殊能力あるわけないでしょ。勘は人間より鋭いとは思うけど」
「いや、もう確実に読んでるじゃん、俺の心！」
「主がわかり易すぎるんだよ」
「もう面布着けないほうがいいような気がしてきた……。隠してるのに全部丸わかりのほ

うがなんか恥ずかしい……」
「それはどっちでもいいけどさー」
障子を大きく開け放ったまま、加州は部屋に入ってきて俺に着替えを促した。
「……障子は閉めないの？」
「ちゃんと空気の入れ換えしてからね」
「そ、そうか……」
ゆうべ、俺が気がついたときには汚れた体はすでに綺麗にされていて、体液やらなにやらでめちゃくちゃだった浴衣等も片づけられていた。空気の入れ換え的なことも燭台切がやっていた記憶があるのだが、……それでは足りなかったのか。
「ねえ、なんか気持ち悪いぐらいいっぱい痕つけられてるんですけど」
「えっ」
着替えの途中、加州は刺々しい言葉を並べながら、気持ち悪いぐらい痕がいっぱいあるという俺の肌をとんとんと指差した。
そう言えば神気交換の間中、体のあちこちをしつこく舐められて吸われた記憶が朧げにある。加州に指摘されるまですっかり忘れていたけれど。
今さらながら、加州の視線からそれらを隠そうと着物の袷を両手で掻き寄せると「遅い

よ」と呆れたように溜め息を吐かれた。
「まあでも、無事に済んでよかったね。刀選間違ってなかったじゃん」
「あ、うん……。なあ、もしかして今朝の鈴鳴らしたのって――」
「燭台切」
「やっぱりか……」
あのキビキビ具合は俺の霊力のおかげか！
今後、一口団子などの特殊な疲労回復アイテムを使う以外で元気になった男士がいたら、その男士が俺と神気交換をしたことがすぐにバレるということだ。……仕方がないこととは言え、それはかなり居た堪れない。
「主も、体調悪いとかないよね？」
「うん。尻は痛いけど体調はいい。神気交換ってすごいな。いや、すごいって、エネルギー補給的な意味でだけど……」
俺にはこれまで神気不足だという自覚はまったくなかった。男士たちのように戦うわけではないので、わかりにくかったのかもしれない。ゆうべの神気交換では、燭台切の神気が自分に流れ込んで全身に染み渡るのをはっきりと感じた。和紙に水滴を落とすと、そこからじわっと一気に水分が浸透して広がっていくあの様子に似ていた。

自分にとってあまりにも新鮮で目覚しい感覚だったので、気恥ずかしさも忘れてついそう言うと、加州はそれまでよりもさらに冷ややかな視線を俺に向けた。
「ふぅん。尻が痛いなら手入れ部屋入ったら？」
「手入れ部屋って審神者にも有効なのか？」
「知らねー」
思いっ切り投げやりな台詞を吐いて、加州が舌打ちをする。
なあ。審神者の扱い、雑すぎじゃない？？

――◆――

主の部屋から自室に戻る前に、燭台切は厨に顔を出した。今朝の厨当番は免除されていたけれど、これはもう身についた習慣だから仕方ない。
「おはよう、燭台切。今日の朝餉の準備は僕と長谷部でするよって言わなかったかい？」
厨を覗いた燭台切に気づいた歌仙兼定が声を掛けてくる。

「聞いてたけど、毎朝ここに来ないと落ち着かなくてね。なにか僕に手伝えることある？」
「別にないよ。……というか」
そこで言葉を区切って燭台切の顔を凝視したあと、歌仙は眉根を寄せて悪態を吐いた。
「そのつやつや顔が少々癇に障るんだが」
歌仙の隣りに立っている長谷部も、歌仙同様むっつりと顔を顰めている。
長谷部は言わずと知れた主命マンだ。歌仙もこの本丸の古株としての矜持があるからか、今回の刀選には納得がいかなかったのかもしれない。
しかし、だ。彼らの気持ちはわからなくもないけれど、ここまであからさまな敵意を向けられるのは少々理不尽だと思うのだ。主との初の神気交換役は、燭台切が自ら名乗り出たわけではないのに。
「あはは。思いのほか美味しい霊力でね。少し戴きすぎたかな」
燭台切の煽りに、歌仙と長谷部は特大の舌打ちを贈ってきた。血の気が多い長谷部はともかく、雅にこだわりをもつ歌仙には似つかわしくない振る舞いだ。それだけ腹に据えかねているのだろう。
「ここは俺と歌仙で充分だ。貴様は起床の鈴を鳴らしてきてくれ」
「オーケー」

厨を出た燭台切の背中に「加州と顔を合わせないように注意しろよ」と長谷部から声が掛けられる。

ああそうだ。この二振りも面倒だけれど……。

一番厄介そうな刀の顔を思い浮かべて溜め息を吐いた。

長谷部の忠告も空しく、燭台切は目的の場所に向かう途中で加州とばったり遇ってしまった。先ほどの二振り以上に厳しい対応をされるかと身構えていたが、加州の反応は思いのほか冷静だった。

「おはよ、燭台切。鈴鳴らしに行くの？」

「おはよう加州くん。うん。長谷部くんに頼まれたから」

おそらく加州は今から主の部屋に向かうのだろう。中庭を臨む廊下の庇に吊るされた鈴のところまで行く自分と並んで彼も歩き出す。

燭台切を、主の初めての神気交換相手にと選んだのは主と加州だ。この本丸の初期刀としての重要な役割ではあるけれど、その選択と決定は彼にとって少し酷だったと思う。加州は誰から見てもわかり易く今代の主を慕っている。いっそ心酔と言ってもいいぐらいに。

今代の主がこの本丸に来てまだふた月ほどしか経っていない。刀剣男士がほとんど無条

件に審神者を慕うのは刀の性であることは理解しているけれど、加州の場合はその範疇を超えている気がする。

「今の主ってさ――」

「ん？」

唐突に、お互いの間に漂う気詰まりな沈黙を破ったのは加州のほうだった。

「今の主。『俺は審神者に向いてなさすぎ』とか『デキが悪い』ってよく言うんだけどさ」

「なんだいそれは」

「わかってないよねー。デキの悪い審神者なんか、俺たちの神気で満ちたこの場所に入った瞬間ぶっ倒れるっつーの」

「そうだね」

刀剣男士たちが発する神気は、特殊な霊力をもたない審神者以外の人間には強すぎる。普通の人間なら、一時たりともたずに意識を失うだろう。たとえそれなりの霊力を持っていたとしても、その本丸との相性というものがあって、相性が合っていなければたちどころに気分が悪くなってしまう。

それについては燭台切に限らず、どの刀剣男士も把握していることだろう。

「あの人、ここに来てまだふた月だからさ、慣れないことも多いと思うんだけど、毎日執

務の間にもいっぱい勉強して頑張ってるんだ」
「そっか。なら美味しいものたくさん作って、主に食べてもらわなきゃね」
燭台切が入れる合いの手を軽く流して加州は続けた。
「人と接するのが苦手なのに、俺たちと仲良くなろうって頑張ってんの。審神者が刀のことに気を配るのは当たり前って言われちゃえばそれまでだけど、あの人、俺たちが自分の力をちゃんと活かせるように、折れないようにって、いっぱい考えてる」
「ああ」
「だから俺はあの人が大好きだし、他の刀たちにも好きになって欲しいし、大事にして欲しいんだ」
「……もちろんだよ。わかってる」
『主を好きになって大事にして欲しい』
加州は、これが一番言いたかったのだろう。
燭台切の審神者に対して持っている想いは、おそらく加州や長谷部、その他の刀剣たちとは少し違った。刀の性で、もちろん悪感情などを抱くことはなかったけれど、あくまで審神者と刀剣男士、使役するものとされるものという、あっさりしたものだったと思う。
だから先代や先々代の審神者が引退してこの本丸を去ったときも、燭台切は長谷部のよ

うに深く落ち込むことはなかった。「ああそうか」とそれだけだ。
加州は燭台切が審神者に対してこれまで持っていた淡々とした感情を、正しく見透かしていたのだろう。
しかし現金なもので、同衾したことで（と言っても神気交換は仕事のようなものなのだが）今代の主への情が深まったのは確かだ。彼は前の主たちよりも人が好く親しみやすい。
霊力もかなり甘かった。つまり、相性がいいということだ。
「僕も彼が好きだよ。というか、もっと好きになった――って感じかな」
含みを持たせた燭台切の言葉で、加州は美麗な顔を盛大に顰めた。
「うっざ。燭台切だけが主と神気交換するわけじゃないから。調子に乗んないでよね！」
「はいはい」
とげとげしい台詞を燭台切に投げつけて、加州は足取り荒く去って行った。